氏名	御 牧 信 義
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 633 号
学位授与の日付	昭和62年 3 月31日
学位授与の要件	医学研究科内科系脳代謝医学（発達神経科学）専攻 （学位規則第 5 条第 1 項該当）
学 位 論 文 題 目	**小児期における短潜時体性感覚誘発電位の発達に関する研究**
論 文 審 査 委 員	教授 木本 浩　教授 大月三郎　教授 堀 泰雄

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

中枢神経機能の発達に関する系統的研究の一環として，生後2週より32歳までの健常人185名につき短潜時体性感覚誘発電位を検討し，以下の結果をえた。

1）各頂点の出現頻度

各頂点のうち，Ｐ1，Ｐ3，及びＮ1は全例で常に認められた。これに対し，Ｐ2は全年齢を通じ出現率は82.9％であった。Ｐ2の出現率には発達的変化は認められなかった。またNa，Nb の出現率は全年齢を通じ，平均 48.3％及び46.9％であり，年齢的変化に乏しかった。

2）頂点潜時の発達的変化

Erb 電位及びＰ1 の頂点潜時は生後 6 カ月まではわずかに延長を示し，以後 3 歳までは不変であったが，その後16歳まで延長を示した。これら以外の頂点潜時は生後 8 カ月までは短縮を示し，以後16歳まで延長を示した。

3）頂点潜時の上肢長補正値の発達的変化

Ｐ1，Ｐ2，Ｐ3及びＮ1 の各頂点潜時の上肢長補正値は生後 6 カ月まで比較的急激に減少した。その後，更に減少をつづけ，10歳で成人値に達した。頂点潜時の上肢長補正値の発達過程における critical age は生後 6 カ月と10歳と考えられた。

4）頂点間潜時の発達的変化

Ｐ2－Ｐ1 頂点間潜時は乳児期には減少を示し，生後 3 歳まではほぼ一定であり，その後延長を示し，15－18歳で成人値に達した。一方，Ｐ3－Ｐ2及びＮ1－Ｐ3 頂点間潜時には発達的変化は明瞭ではなかった。

これらの知見はSSEPが中枢神経系の発達の評価に有用であることを示しており，各月年齢別正常標準値は，SSEP の臨床応用に際し，指標になりうると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究は中枢神経機能の発達に関して，健常人185名につき，各月年齢別に短潜時体性感覚誘発電位を研究したものであるが，中枢神経系の発達の評価と臨床的応用について重要な知見を見たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。